

原 著

花粉学講話 IX (No.86-96)

上野 實朗*

Souvenirs palynologiques IX (No. 86-96)

Jitsuro UENO*

(受付：1985年5月31日)

86 1985年度スギ花粉症話題

Topics of *Cryptomeria pollenosis* in 1985

第25回日本花粉学会大会(1984・X・7 名城大学)で多くの会員が1985(昭和60)年春はスギ花粉が多量に発生放散されるだろうと予測した。この予測は的中し、スギ花粉症は大流行した。その結果、日本花粉学会々員が色々な方面で活躍し、スギ花粉とスギ花粉症の宣伝に役立った。

新聞・週刊誌・ラジオ・テレビでもスギ花粉症はとり上げられ、中にはいささかピント外れのマンガ・記事・単行本もあった。そのためスギ花粉症ではなく、花粉恐怖症ではないかと私は心配した。

私はスギ花粉症を英訳するのに *Cryptomeria pollenosis* または *Sugi pollenosis* がよいと考える。*Japanese Cedar pollenosis* と書くのは不正確であるから止めて頂きたい。医師の中ではヒマラヤ・シーダーをヒマラヤスギという俗名からスギ科と誤って、*Cedrus* つまり Cedar シーダーをスギと誤訳している人がいる。シーダーはマツ科で、私はヒマラヤ・シーダーをヒマラヤ・マツと訳したいが問題がある。

花粉をみればシーダーはマツのように空気袋を2個つけている。もしも外国の植物学者が *Japanese Cedar* を見たらスギだとは理解しないで、マツだと考えるであろう。

スギの学名は *Cryptomeria* である。しかし病名としてスギ花粉症の発音をそのまま書くとすれば *Sugi Pollenosis* でもよいと考える。この名称はすでに斎藤洋三博士も「スギ花粉症」(1980 p. 77)で記している。

註 斎藤洋三 1980 スギ花粉症 すずさわ書店 1,100円

註 早田文蔵博士の植物分類学・第一巻・裸子植物篇(1933 p. 489)にゴヨウマツ亜属の *Pinus longifolia* をヒマラヤマツと和名をつけている。マツ科ヒマラヤ・シーダーを早田博士がヒマラヤスギと和名をつけたので、ヒマラヤスギをスギ科だと誤解するようになった。和名としては不正確である。

*〒420 静岡市瀬名189 静岡大学名誉教授

Professor Emeritus of Shizuoka University Sena 189, Shizuoka, 420 Japan.

87 静岡でのスギ花粉症 (1985)

Cryptomeria pollenosis of Shizuoka (1985)

スギ花粉症流行の予報を察知したのは日本葦器製薬KK学術課であった。そして別紙のような社内資料を印刷した。この資料を持って同社プロパーが拙宅を訪れ、医師へ配布する許可を求めに来た。

つづいて2月1日にはNHK産業科学部の鬼丸真人(ウルトラアイ係)が取材に来た。彼はNHK書庫にあった「花粉百話」を読み、質問をし、半日座りこんで大型ノートに沢山メモをして帰った。

その後、2月21日の静岡新聞に「イヤーナ花粉症、今年も大量の花粉が飛散」なる記事、静岡放送SBSラジオで私は静岡県内のスギ花粉症の実態・対策・治療とくに静岡県西部医療センター耳鼻科の宇佐神篤博士の活躍を紹介した。

この記事とラジオについてすぐに反応があった。患者からの問い合わせもさることながら、眼科医との交流が始まった。2月23日浜松市で静岡県西部眼科医グループの放談会に招待され、アレルギー性眼炎について東海大学医学部眼科助教授の三国郁夫博士の講話を聞く機会を得た。さらに浜松医科大学衛生学教授の櫻井信夫博士が花粉研究をしていることも知った。

つづいて2月26日にはNHK(静岡)テレビで「花粉症にご用心」なる番組に出た。そして私が20年前につくった約2000倍の着色したスギ花粉模型が活躍した。

私はこれまで小児科・アレルギー内科・耳鼻科の医師達との会合には出席したことがあったが、眼科医との勉強会は初めてであった。今後、各地で同様な放談会・座談会・勉強会がもたれるようになっていたと思っていた。幸いにそのチャンスは別のグループから話をもちこまれた。

静岡教育会(会長・佐久田昌一・もと静岡県教育長)から執筆をたのまれて、県下の小中高の先生・児童・父兄に拙文「花粉症の友へ」を書いた

この人達はスギ花粉症に苦しめられていた。そこ

へウルトラアイやクローズアップがNHKから放送された。その結果は医者だクスリだと心配する人が多くなった。そこで私は同病の人達に先輩の体験談を書いた訳である(1985年3月25日 静岡教育ニュース第30号)。

つづいて畏友・山脇通弘・常葉学園大学助教授(教育学部体育担当)から、彼の主催する「子供の体と心を考える会」の1985年4月13日に呼ばれて静岡市中央公民館で講演をした。新聞・ラジオ・テレビで広く知らされていたので沢山の患者・父兄・先生が集まった。約束の時間をすぎても「私の体験談」は「ブタクサ花粉症28年間」の実績にもとづいて質問攻めとなった。この病歴は拙著「花粉学研究(1978)」のpp.124-140を参照されたい。

88 NHK テレビのスギ花粉症 (1985年3月)

Cryptomeria pollenosis of NHK Television (1985 March)

NHKの鬼丸真人ウルトラアイは拙宅で取材した内容が一度の放映では無理だと知り、急いでクローズアップ(3月5日)を用意した。その中で本会員の佐橋紀男博士(東邦大学)や奥田稔博士(日本医大)の話は大いに面白かった。とくにスギにはオバナがあり花粉が飛散するというを一般の人々に理解させるのに有益であった。

ウルトラアイはNHK産業科学部の実力を発揮するものとして大いに期待した。鬼丸君の父君は私の福岡高校・東京帝大での親友であった。遠慮なく苦言・秘策をさずけた。例えばスギ花粉落下速度測定実験法は私が大阪市立大学理学部にいた頃、何度も実施したダーラム式装置の改良型である。スギ花粉を落す時の初速の問題、円筒の直径・長さ・素材、花粉の静電気チャージの発生による落下速度への影響、円筒内にスチールをおき水平顕微鏡で記録する方法。ほか色々詳細な注意を与えた。私に代ってNHKがやってくれるという安心と期待。そして結果はスギ花粉の室温内での落下速度は秒速約5センチという答がでた。

また千葉林業試験場で40メートルのスギの大木にビニールシートをかぶせ、10日間おいて採集した花粉重量が1320グラムというのも面白かった。とくに独協大学アレルギー内科で3年間かかってスギ花粉症に感作させたモルモットの実験は素晴らしかった。

しかし人体粘模上でスギ花粉が吸水破裂すると花粉症がおこるかのような説明は非科学的である。何故ならスギ花粉外皮表面に散在する微小な粒子（ユービイッシュ体）が花粉自体の化学成分と同じだからである。つまりウルトラアイは花粉の形態や構造についての最も重要な性質をボカしてしまった。ウルトラアイは科学教養番組だといわれるが、実際は野球選手が花粉症で引退したという話を入れたため大衆娯楽番組化して、いまひとつ物足りない内容となった。

しかし山川アナウンサーは流石にベテランである。私が鬼丸君にアドバイスした中から大切なトピックスを忘れずに、しかも最後の数分の中で、さりげなく話をして、しめくくってくれた。それは外国の新聞・ラジオ・テレビで毎日放送している「花粉通報」と三原市土肥素子会員から知らされた昭和58年3月16日中国新聞にでていた「スギ花粉飛散で広島市で火災警報」であった。このテレビがスギ花粉と花粉症の理解に役立ったことは大いに意義があった。

89 Prof. Jacques Loeb と桑田義備先生

Prof. Jacques Loeb and Dr. Yoshinari KUWADA

Jacques Loeb (1859-1924) は実験生物学とくに生理学で走性や再生、人為単為生殖などの研究をした人で、ドイツ生れでアメリカで研究生生活を送った。桑田先生（京都大学名誉教授 1882-1981）は本講話（VI-55）で記したように私の恩師である。

桑田先生がLoebの研究室を訪門した時に彼が桑田先生に贈られた次の言葉がある。

“With best wishes for the development of science and a better type of humanity.” 桑田先生より23歳も大先輩Loebのプレゼントは先生の胸に深く

刻まれた。「科学の発展と人格の向上」こそ桑田先生（1962年文化勲章）の終生の願であった。

桑田先生の高弟は皆この目標に向かって精進した。その高弟の一人、中沢潤・弘前大学名誉教授がこの度出版された名著「花粉」の序文はこの言葉で結んである。

中沢博士がこの句を引用したのは次のようなエピソードがある。敗戦後、彼が桑田先生から頂いた手紙の中に「近日ボツボツ整理を始めて仕事にとりかかりたいと思っています。御一緒に大いに勉強しましょう。私が留学時代にProf. Jacques Loebを訪ねた時にWith best wishes for the development of science and a better type of humanityと書いてくれました。大いに勉強しましょう、お互いに。」との御言葉があり大変感激したという。そして彼は一人でも多くの方々にこの言葉を使って頂きたいと結んでいる。この師にしてこの弟子あり。

註 1983（昭和58） 桑田義備先生の思い出 花粉学講話VI-55 日本花粉学会会誌 第29巻・第2号。

90 中沢 潤の花粉（その生いたち）—ミクロの世界（1985）

Zun NAKAZAWA: POLLEN (1985)

著者は昔からの日本花粉学会の会員で、京都大学理学部植物学科細胞学の桑田義備先生（文化勲章受賞）の高弟の一人である。1937（昭和12）年以來、一貫して核分裂を研究してきた弘前大学名誉教授である。この書はライフワークのムラサキツユクサ花粉の形成・発育について在職中、多くの学生達を指導した体験に基づき、その成果を透過型電子顕微鏡・走査型電子顕微鏡を用いて見事な写真で綴っている。彼の真面目な性格は恩師の桑田先生ゆずり、それに加えて温厚な人格は愛弟子を心暖まる思い出とともに語っている。

流石に50年に垂んとするキャリアは説明の隅々まで行き渡っている。研究した花粉はムラサキツユク

サ (図 1—32) ツルボ (図 33—37) シクラメン (図 38—39) テッポウユリ (図 40) である。花粉粒とくに花粉膜の発達には断面構造でしか分からないことがある。この際に必要なのは透過型電子顕微鏡による研究である。しかし透過型電子顕微鏡の資料製作は困難で熟練を要求される。この本には電顕技術が実地にもとづいて詳細に説明してある (pp.89—102)。誠に貴重な文献である。医学書のあるのは動物細胞組織の標本作製法である。植物資料では細胞壁 (cell wall) があるので仲々、教科書通りにはいかない。

花粉材料では固定・脱水・包埋・切片で特殊な工夫がある。上野も奈良女子大学細胞学研究室で重永道夫博士 (奈良女子大学名誉教授) から指導を受けたので、その苦労は痛感している。よい記述をしてくれたことを深謝する。

とくに花粉症が問題となる現在、本書によれば花粉膜が成長して発育する過程で、花粉母細胞の遊離物質が花粉膜表面に付着する状態がよく観察できる。この表面付着物質こそ花粉が人体の鼻粘膜などに付着した際の感作する抗原物質である。例えばツルボ花粉でユーピイッシュ体 (オービクルス) が外壁に入りこむ状態が見事に写されている (図 376)。

花粉学者にとって必読の書であるが、残念ながら発売されていない。ただし希望者は下記に送料・実費の合計 5,000 円同封して申し込みば入手できる。

記

〒 036 弘前市富士見町 1—15

Tel (0172) 32—6916

中沢 潤

註 本書のサイズは 19×26.5 センチ。104 ページ。電顕図版 40。印刷やまと印刷KK。1985 年 3 月 20 日発行。

91 恐竜の糞石と糞花粉学

Coprolite of Dinosaurs and Copropalynology

動物の糞の中にある花粉・胞子を研究する学問をコプロパリノロジー (糞花粉学) とよぶ。アメリカ・

インディアンに住居跡の人糞からサボテンやユッカの花粉を発見した人類学者は昔、彼等はこれらの花を野菜としてたべたと考えた。シベリアのマンモスについてソ連のクブリアノバ女史が糞中から Poa 花粉を確認している。私は「花粉百話」(第 86 話) でイグアノドン (コプロライト) の花粉について記した。それはいつか恐竜の墓場を訪れ、糞石を採取しなかったからである。

1984 (昭和 59) 年 8 月 30 日に私はカナダ・カルガリー大学で行われた第 6 回国際花粉学会議 (VI IPC) の公開講演で親子二代にわたり恐竜研究家である二代目 Dr. Dale Russell の The Life and Times of the Dinosaur を聞いた。その翌日、Field trip としてロッキー山中にあるアルバータ州立恐竜公園を尋ねた。案内は Russel 教授の助手 Doreen Masran で、我々素人にも分るように親切に案内してくれた。ここには草食恐竜 Styracosaurus の骨が一頭分そっくり残っている。そばに復原したセメント像がある。その写真は花粉学講話 VIII (78 話) の写真 (Fig. 11) にある。しかし糞石はそんなに簡単に発見できなかった。Doreen は後から送ると言ったが、いまだに入手していない。

そこで参考品としてアメリカ・ユタ州 Salt Lake City 東南 Carbon 産ジュラ紀のコプロライトに目をつけた。学友・小島郁生・国立科学博物館地学研究部長は私の希望を聞いて東京サイエンス社に電話で注文してくれた。1 キロ 3,000 円という安価である。しかし果してジュラ紀なのか、草食恐竜の糞石かは不明である。とにかく私はこの石を静岡大学理学部地学教室で切断して新しい面を調べようと考えた。2 億年たつと糞も一部は美しい赤い瑪瑙 Agate, Onyx になっている。もしも幸に草食恐竜で、しかもコウヤマキ花粉でも出てきたらと夢と期待に一人で興奮している。私の悪い癖である。新しい断面を毎日見ている。

コウヤマキ花粉の可能性は長崎大学の高橋清教授の会話からである。会議に先だち地学者達の野外巡検が行われた。そして植物化石の中にコウヤマキが

あったと彼は私に知らせてくれた。しかしその地層が恐竜とどんな関係があるのか詳しく知らない。北米大陸にコウヤマキが地質時代に生えていたことは確実である。さてこのコウヤマキ花粉が果してプロライトから発見されるだろうか。これまでの花粉分析教科書、例えば Faegri などにも記していない。もしもコウヤマキ花粉が出てきたら早速、愛弟子のシャトル・ワシントン大学の塚田松雄教授に知らせたい。2人でロッキー山を歩こうと考えている。

註 東京サイエンス社 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル Tel (03)350-6725

註 1982(昭和57) 動物媒花粉 花粉百話(第86話) 風間書房

92 フェーブルとイナゴマメの花粉

J. -H. FABLE et le pollen de *Ceratonia siliqua* 1

昆虫記で有名なフェーブル(1823・XII・20 文政6年-1915・X・16 大正4年)は花粉についても興味をもっていた。彼は16年間勤務していたアビニオン中学校教師を公開講義をしたことで首となり、家主からは家を追い出された。しかも普仏戦争でパリは陥落し、本の印税も入らず、彼は貧乏のどん底におちいった。そしてオランジュの田舎に逃げた。こうして48歳(1871・明治4年)で無一文となった時、彼は大好きな少年少女のため「子供のための科学の本」(邦訳・科学物語)を書いた。この本は好評で、彼を勇気づけた。そしてそれから7年たって「昆虫記」第1巻を出版した。55歳の時である。「昆虫記」は84歳の時に第10巻を出した。その後も原稿を書きつけた。現在も彼の机の上に未発表の手書きの原稿が置いてある。

イナゴマメは「科学物語」の第61話にてでている。「雌雄異株なのでメスの木だけでは結実しない。果実はエンドウの莢に似て、非常に長い。種子の上に甘い肉がついている。」とフェーブルは説明している。

イナゴマメはマメ科ジャケツイバラ亜科 *Ceratonia siliqua* L. で、常緑小高木6~10m。東地中海・中近東・南アフリカ・インド・オーストラリア・北米などにある。莢はパルプ質で糖分30%、家畜飼料や食糧に用いられる。古いアラビア文化を伝える宗教植物で、「ヨハネのパン」・Carob・Kharoub(アラビア)・Algaroba(スペイン)などと呼ばれる。

フェーブルのいう「種子の上についた甘い肉」はカルンクル Caruncle(種阜・軟肉)なのかも知れない。そして彼自身食べてみてカルンクルを見つけたのではあるまいか。「ヨハネのパン」として甘い莢に気どられて多くの人はカルンクルを見落しているのではないか。また日本で植えても結実したことはなかったと報告されているが理由は不明である。

次にイナゴマメの花粉を彼は顕微鏡で見ているのか否かは知らない。「科学物語」には花粉(p.264)・胞子(p.283)のスケッチがでている。しかし原著をみていないので彼の図か否かは不明である。私は1956年10月21日にセリニヤン村のフェーブルの家(ファルマス荘)を訪れた。そして彼の愛用の顕微鏡と原稿をみてきた。

イナゴマメの花粉はエルトマン(1952 p.227)によると3-5-colporoidate(類内口式溝型) subprolate(亜長球型)37×29ミクロン、sexine(外層)はnexine(中層)と同じ厚さ。その表面は平滑でなく、baculate(円柱型)である。上記の花粉図(p.264)にはイナゴマメの花粉らしいものはない。私はいつか再びファルマス荘を訪れて、彼のスケッチを調べ、花粉についての業績を公表したいと思っている。何故なら最近出版された「フェーブル植物記」にも花粉についてはふれていないからである。

註 1928(昭和3) 模範家庭文庫・フェーブル科学物語 前田晁訳 富山房

註 1930(昭和5) フェーブル科学知識全集・第9巻・植物の世界 アルス刊

註 1938(昭和13) フェーブル科学物語 前田晁訳 富山房百科文庫41

- 註 1960 (昭和 35) ファーブル昆虫記 中村 浩
訳 あかね書房
- 註 1984 (昭和 59) ファーブル植物記 日高敏隆・
林瑞枝訳 平凡社
J.-H. Fabre: Histoire de La Buche récits sur
la vie des plantes
- 註 1981 (昭和 56) ファーブルとカボチャの花粉
花粉学講話 I - 9 日本花粉学会会誌 第 27
巻・第 1 号
- 93 中国孢粉学会第一回シンポジウム論文集(1979)
**Selected papers from the first symposium of
the palynological society of china (1979)**

北京にある中国孢粉学会編輯の論文集である。論文は 29 あるが花粉分析に関係した研究が多い。本文 195 ページ。写真図版 40 枚。次にそのタイトルを記す。編集は 1979 年だが、印刷は 1982 年。18.6×26 cm。中国科学院印刷所印刷。科学出版社出版。定価 3.65 元。

- 94 中国産ヤマグルマ科フサザクラ属花粉の形態
(1984)
Pollen morphology of *Euptelea*, *Trochodendraceae* in China (1984)

フサザクラ属は日本には、*Euptelea polyandra* Sieb. et Zucc. 一種だけである。幾瀬 (1956) によると 6-rugate (6 敬溝) である。しかし Erdtman (1952 p. 176) は *Euptelea francheti* は 6-rugate、*Euptelea pleiosperma* は 3-colpate (以上中国産)、*Euptelea polyandra* (日本) は 3-colpate または 6-rugate と記している。

北京の植物分類学報(第 22 巻、第 6 期 1984 年 12 月)によると領春木 *Euptelea pleiosperma* Hook. f. et Thoms (図版 3 : 1—8) は 3-colpate (3 溝型) で、总櫻 *Euptelea polyandra* Sieb. et Zucc. (図版 2 : 3-10) は、一般に 6 条 (6 溝) で、わずかだが 4 条あるいは 5 条などが存在する。フサザクラは日本特産なので研究した材料は日本の標本である。

同じ *Euptelea* 属の中で発芽溝が 3 本あたり 6 本あたりすることは面白いが、珍しいことではない。ツツジ科サラサドウダン属でも発芽溝の数に変化する(上野 1950)。上野が 6 溝に興味をもつのは 6 面体花粉だからである(上野 1983)。「花粉形態学における数学的解析 IV」の第 1 図・第 2 図・第 3 図で示した通り、双子葉植物では 9 科にその例がみられる。そしてフサザクラ属では 6 溝型と 3 溝型が両存する。この 2 型両存は 3 溝と 6 溝との相互変化の可能性を推理する上から重要である。

- 註 王伏雄・銭南芬・張玉竜 1984 昆梓樹属、水青樹属和領春木属花粉形態的研究
- 註 上野実朗 1983 花粉形態学における数学的解析 IV 天然 6 面体 (ツルムラサキ) と人工 6 面体 (カニサボテン) 日本花粉学会会誌 第 29 巻 第 1 号 pp 11-23

- 95 バラの香りのするツバキ (玫金香)
**(*Mai-Kin-Ko*) with perfume of *Rosa*
Camelia in China**

北京発新華社によると、「ツバキの里」として知られる中国雲南省で、このほどバラに似た香りのするツバキの新種が発見され「玫金香」と命名された。

花は薄紅色で、花期は 12 月中旬から翌年 2 月まで。咲き始めは香りが弱い、満開から末期には特に香りが強く、散った花びらにも香りが残っている。

「玫金香」は、ツバキ科ツバキ属で、実をつける(朝日新聞 1985 年 2 月 5 日)。

この記事は中国植物研究所の学友によるが更に詳しい報告がほしいものである。花粉の形質はどのようなものであろうか。また植物の香氣についての権威岩波洋造博士の研究材料であらう。

- 96 科学者の創造性とコリングウッドの警句
**Originality of scientist and the witticism of
Collingwood**

コリングウッド R. G. Collingwood (1889-1943)

はイギリスの歴史家で哲学者・美学者である。彼はその「美術の原理」で私達にも教訓となる名言を述べている。

「芸術的活動はレディーメイドの言語を用いるのではない。その活動の進行のうちから言語を創造することが大切である。」これを言いかえると、「科学的活動はレディーメイドの言語や、一人よがりの術語を用いるのではない。その研究活動から創造性を生み出すべきである。短的にいえば、学者の仕事の価値はオリジナリティー（創意工夫・創造性）にある。逆にいえばオリジナリティーの無い仕事は無価値である。」座右の銘としたい警句である。

コリングウッドはイギリス・オックスフォード大学研究生（1913）をへてマグダレン大学教授（1935

-1941）となる。2度の世界大戦を通じて、人間事象に関する問題を解決するのは科学ではなく、歴史と結びついた哲学である事を確信した。彼は直接体験から美学へも深い関心を示した。彼のライフワークは哲学と歴史とを関連づけることであった。この貴重な書は高原 博（美学者）静岡県立静岡女子大学名誉教授から拝借した。厚く御礼申し上げる。

註 R. G. Collingwood 1937 The Principles of Art. Art as language § 2 Art proper and Art falsely so called p.275: The artistic activity does not 'use' a 'ready-made language' it 'creates' language as it goes along.

Summary IX (No. 86—96)

86 Topics of *Cryptomeria pollenosis* (Sugi pollenosis) in 1985. 87 *Cryptomeria pollenosis* (Sugi pollenosis) of Shizuoka (1985). 88 *Cryptomeria pollenosis* (Sugi pollenosis) of NHK Television (1985 March). 89 Prof. Jacques Loeb (1850-1924) and Dr. Yoshinari Kuwada (1882-1981). 90 Pollen (New Book of Pollen grains) by Dr. Zun Nakazawa (Professor Emeritus of Hirosaki University). 91 Coprolite of Dinosaurs and Copropalynology. 92 J. -H. Fable et Le pollen de *Ceratonia siliqua* L. 93 Selected papers from the First Symposium of The Palynological Society of China (1979). 94 Pollen morphology of *Euptelea*, Trochodendraceae in China (1984). 95 *Camelia* (Mai-Kin-Ko) with perfume of *Rosa* in China. 96 Originality of scientist and the witticism of R. G. Collingwood (1889-1943).

昭和60年 3月25日発行

A D E S

第30号(毎月発行)

昭和六十年は三年に一度のスギ花粉のアタリ年だとか新聞・雑誌・ラジオ・テレビで大騒ぎしている。戦前、私が花粉の勉強を始めた頃は医者でさえも花粉症という病気を知らなかった。戦後にはわかに有名になったキツカサは占領軍が関東地方のブタクサで苦しめられたからであった。私も昭和三十三年秋からブタクサ花粉症で悩まさせている。思えば大正十二年春、私は小学校四年生となり、理科の勉強が大好きになった。母は玩具の顕微鏡を買って来てくれた。これで花粉を見たのが病み付きとなり、大学でも花粉を卒業テーマに選んだ。以来約六十年間、花粉に見込まれた私は今さら花粉と離縁も出来ず、花粉と仲良くしながら、花粉症ともつき合っているとは誠に因果な話である。これもまた異なった花粉症のひとつかと諦めている。

科(群大)・耳鼻科(静岡済生会)・眼科(東海大)などの医師達と勉強することとなった。つまりかたは苦しみ、かたは喜び、かつは楽しみつつ花粉症と取り組んできたのである。その結果、私の病歴は専門書にとり上げられ、今や由緒正しき職業性花粉症患者と公認された。つまり私は理学博士のモルモットなのである。

しかし花粉がすべて患者ばかりということではない。花粉症の原因となる花粉もあるが、な



花粉症の友へ…… 負け戦に勝つ法……

上野 賢朗

らない無害の花粉もある。旧友である花粉の汚名挽回のため申し上げるが、マツ花粉は花粉症の原因ではないとされている。大田主がイナバの白兔の怪我を治したのは蒲黄(ガマの花粉)である。

どの花粉が、どの人に、どんな状態で花粉症の発作をおこすかはマチマチである。つまりスギ花粉だけを用心しておればよいのではない。

私はスギ・マツなどの花粉を五十年以上も取り扱って、吸い

こんできたが、一向に平気である。私にイタズラする患者は秋のブタクサ・カナムグラ、夏のヒメガマなどである。これらは研究材料として取り上げて以来感作された、要注意の曲者なのである。

私の花粉症の発作は目のカユミから始まる。鼻よりも目はハルカに鋭敏である。これを私は軽度発作とよぶ。予防薬をのむチャンスである。やがて目は充血し涙がでる。そしてクシャミの連発、鼻汁流出となる。これを中度発作とよぶ。薬をすぐに服用せねばならない。

恐ろしいのは秋の夜中、台風接近、前線通過、一寸とした気圧・気温の変化でおこる発作である。一発のクシャミで目をさますと、鼻汁の洪水である。上を向いて寝ると鼻がつまる。テイツシュペーパーの山ができる。こういう時は蒲団に背をもたせて座って、静かに呼吸するのが安全である。

その理由は喘息状態をひきおこさないためである。激しい動

悸と呼吸困難から今にも息がつまりそうな不安におそわれる。いうなれば地球上の空気が私の周囲から宇宙へ飛びさるのではなか。いくら呼吸しても呼吸しても肺に空気が入ってこない。こうなるほど重度の発作である。しかもこの状態が通勤途中で、満員電車の中でさえおこったのであった。真剣に自衛手段を講じなければならぬ。

さて春三月、学年試験・入学試験・就職試験と試験がつづき、さらにお見合・結婚式の大切なシーズンなのにスギ花粉は無情な追打ちをかけてくる。とくに小児喘息の子供は見るも哀れである。しかも花粉症をおこすアレルギー体質は遺伝する。私の子供も孫もアレルギー体質である。しかし花粉症で死んだ例は聞かない。私に言わずと花粉症はエリートのかかる病気で、牛や馬は花粉症にかからない。

そこで花粉症対策の結論をのべることにしよう。確実な予防法がひとつある。花粉に接触しないことである。スギ花粉症に苦しむ人は、スギ花粉の飛来・飛散しない南半球か、絶海の孤島へ逃げだすことである。スギは日本、とくに本州の特産であるからである。北海道から飛んではいけない。花粉が本州から飛んでいく可能性はある。NHKテレビのクローズアップ(三月一

五日)・ウルトラアイ(三月一八日)は、いずれも涙ぐましいスギ花粉症物語である。

私の体験から生み出した花粉症作戦の極意は「先手必勝」で宮本武蔵の口伝でいえば「枕の押え」であり、イギリス海軍ネルソン提督以来の伝統「見敵必戦」である。つまりどんな軽い発作でも見逃さず自衛手段をとることである。たかが目がカユイ、鼻汁ぐらいで、大したこと無いと考えるのが負け戦のスタートである。辛抱は花粉症にとって美德ではなく悪徳なのである。軽い症状は押えるのが簡単である。枕の押え。重篤な病状になって医者だ、クスリだは手遅れである。大体、自分の病気を治すのに他力本願はおかしい。私はいつもホームドクターと共同作戦をたてている。病院・医者の薬局には妙薬が選取見取とならんでいる。その中から自分の体質に合った薬を医師の指導で探せばよい。ただしこれは患者にも医師にも根気のいる仕事である。シーズン前に荒天準備も合戦準備も完了させよう。負け戦に勝つためにはアラメないで開きなおつて、窮鼠となり猫の花粉にかみつくことである。(日本アレルギー学会評議員・日本花粉学会会長・静大名誉教授 著書「花粉百話」「花粉学研究」風間書房)

中国孢粉学会第一回シンポジウム論文集(1979)

目 录

序	v
芸香科和楝科的花粉形态	张金谈 1
中国北方晚更新世以来古环境初步探讨	周昆叔 梁秀龙 刘瑞玲 6
三江平原全新世泥炭的孢粉、藻类组合及古植被与古气候探讨	王曼华 丘佩芳 夏玉梅 13
黄海晚更新世以来的孢粉组合及其古地理意义	徐家声 22
江苏溧水神仙洞第四纪孢粉组合	张嘉尔 32
我国海洋孢粉学研究进展	王开发 张玉兰 孙煜华 39
贵州惠水盆地全新世孢粉组合特征及地层古气候的探讨	林绍孟 陈承惠 46
根据渭河、沧州的孢粉组合试论暖温带晚第三纪到早第四纪时期孢粉植物区系	李文漪 52
冀北五罗贡早中新世孢粉组合	甘振波 59
渤海海域晚第三纪孢粉组合及其意义	关学婷 田秀梅、孙新华 64
浙东仙居、宁海中新世孢子花粉	郑亚惠 71
孢粉分析在云南晚第三纪煤层对比中的应用	卞百福 75
西沙群岛某钻孔底部的孢子花粉组合及其地质时代	吴作基 余金凤 81
辽河油田东营组石油中的藻类和孢粉及油气运移探讨	王可德 冷兴顺 85
江苏北部如东地区泰州组中的两个新属	周山富 王连元 89
莱阳盆地莱阳群上部早白垩世孢粉组合	余静贤 张望平 93
江苏丰县中侏罗世孢粉化石新知	王从凤 童国榜 100
甘肃崇信富县组孢粉组合及其时代	李秀荣 段文海、杜宝安 105
吉林浑江北山组的孢粉组合	吴洪章 蒲荣干 110
陕甘宁盆地南部中生界孢粉组合	张祖辉 傅智雁 罗坤泉 耿国仓 116
湖北蒲圻中三叠世蒲圻群下部孢粉组合	张振来 125
江西萍乡安源组、三坵田组孢粉组合	钱丽君 吴景铀 130
山东北部二叠纪孢粉	周和仪 141
福建长汀陂角梓山组孢粉组合	黄信裕 152
贵州赫章铁矿山下泥盆统舒家坪组的几丁虫化石	赖小娟 161
苏、皖地区茅山群微体化石及其地质时代	侯静鹏 167
“轻化石”——一种假疑源类化石	王福星 罗其玲 173
大庆油田孢粉化石热变质作用探讨	赵传本 178
孢粉分析方法浅论	黄凤宝 184

SELECTED PAPERS FROM THE FIRST SYMPOSIUM OF THE PALYNOLOGICAL SOCIETY OF CHINA

CONTENT

Preface	(v)
Pollen Morphology of the Families Rutaceae and Meliaceae..... Zhang Jintan	(1)
A Preliminary Discussion on Paleoenvironments of North China Since Late Pleistocene	Zhou Kunshu, Liang Xiulong and Liu Ruiling (6)
Palynomorphs and Algal Swarms from Holocene Peat of the Three-Rivers-Plain and Their Significance in Paleovegetation and Climate	Wang Manhua, Wang Peifang and Xia Yumei (13)
Sporo-pollen assemblages of the Peat-contained Column Samples in the Huanghai Sea and Their Significance in Palaeogeography..... Xu Jiasheng	(22)
A Quaternary Sporo-pollen Assemblage from Shenxiandong, Lishui, Jiansu Province	Zhang Jiaer (32)
Progress in Marine Palynological Researches in China	Wang Kaifa, Zhang Yulan and Sun Yuhua (39)
Holocene Palynological Association from the Huishui Basin, Guizhou Province and Its Stratigraphic and Paleoclimatic Significance	Lin Shaomeng and Chen Chenghui (46)
The Palynological Flora in Warm-Temperate Zone of China from Late Tertiary to Early Quaternary	Li Wenyi (52)
Sporo-pollen Assemblage from the Early Miocene of Wuluogong, Northern Hebei	Gan Zhenbo (59)
On Sporo-pollen Assemblages and Palaeogeography of the Neogene of Bohai	Guan Xueting, Tien Xiumei and Sun Xinhua (64)
Miocene Spores and Pollen Grains from Xianju and Ninghai, Eastern Zhejiang	Zheng Yahui (71)
Sporo-pollen Analysis Applied to Coal Seam Correlation of Late Tertiary lignite in Yunnan	Li Befu (75)
Dating the Pollen and Spores at the Bottom of a Borehole of the Xisha Islands	Wu Zuoji and Yu Jinfeng (81)
Dinoflagellates, Acritarchs, Pollen and Spores from the Dongying Formation of the Liaohe Oil Field, With a Discussion to Oil and Gas Migration	Wang Kede and Leng Xingshun (85)
Two New Genera from the Taizhou Formation of the Rutung Region, North Jiangsu	Zhou Shanfu and Wang Lianyuan (89)
Early Cretaceous Sporo-pollen Assemblage of the Upper Laiyang Group of the Laiyang Basin, Shandong..... Yu Jingxian and Zhang Wangping	(93)
Notes on Some Middle-Jurassic Pollen and Spores from Fengxian, Jiangsu	Wang Congfeng and Tong Guobang (100)
Palynological Assemblage from the Fuxian Group of Congxin, Gansu and Its Geological Age..... Li Xiurong, Duan Wenhai and Du Baoan	(105)

Sporo-pollen Assemblage from the Beishan Formation of Hun Jiang, Jilin	Wu Hongzhang and Pu Yonggan (110)
Mesozoic Sporo-pollen Assemblages from the Southern Shaan-Gan-Ning Basin.....	Zhang Zuhui, Fu Zhiyang, Luo Kunquan and Geng Guocang (116)
Middle Triassic Sporo-pollen Assemblage from the Lower Puqi Group in Puqi of Hubei	Zhang Zhenlai (125)
Sporo-pollen Assemblages from the Anyuan Formation and Sanqiutian Formation of Pingxiang, Jiangxi	Qian Lijun and Wu Jingjun (130)
Permian Spores and Pollen Grains from Northern Shandong	Zhou Heyi (141)
Spores from the Zishan Formation of Pijiao, Fujian	Huang Xinyu (152)
Chitinozoas from the Shujiaping Formation (Lower Carboniferous) of Tiekuangshan of Hezhang District, Guizhou	Lai Xiaojuan (161)
Microfossils from the Maoshan Group of Jiangsu and Anhui, With a Discussion on Its Geological Age	Hou Jingpong (167)
“Light fossils”--- Artifacts or Acritarchs?	Wang Fuxing and Luo Qiling (173)
A Discussion on the Thermal Metamorphism of Fossil Pollen and Spores of the Daqing Oil Field.....	Zhao Chuanben (178)
Notes on Palynological Preparations	Huang Fengbao (184)

社内資料

60年度 スギ花粉ニュース No. 2

—— 「アレルギーの臨床」5巻1号(1985)より抜粋 ——

第25回日本花粉学会大会に
おける花粉症関係の報告

去る59年10月7日、名古屋市名城大学で開催された大会で、花粉症関係の報告と質疑・討論が活発に行なわれた。

「ヒノキ花粉のホスファターゼについて」中山章文(奈良県立病院中央臨床検査部)、井手武・田端司郎(奈良医大化学教室)によると、スギ花粉症のアレルゲンと共通抗原性を有すると思われるヒノキ花粉抽出液中にも同じくp-ニトロフェニルホスファターゼに高い活性を有するホスファターゼが存在する。これを分離して性質を調べた。

「コノテガシワ花粉の抗原性について」井手武・田端司郎(奈良医大化学教室)、芦田恒雄(芦田耳鼻咽喉科医院)は、ヒノキ科に属するコノテガシワ花粉の抗原性の報告がないので調べた。その結果、スギ・ヒノキとの共通抗原性が明らかになった。

「今年(1984)の空中花粉調査報告」では、佐橋紀男・幾瀬マサ・萱沼 亨・北添亜矢子・佐藤順子・中嶋弥生(東邦大学薬学部)によると、関東地方は今年の冬大雪に見舞われ、3月に入ってもスギ花粉はほとんど飛散せず、中旬になってようやく本格的に飛散を開始した。そして4月中旬までの間に大部分の花粉捕集が得られた。例年と異なり、今年はずか1ヵ月間に集中して、1982年の大量飛散に次ぐ捕集量であった。

また、伊豆大島は東京の南100kmにあるが、伊豆半島からはわずか10kmである。したがって、伊豆大島でも伊豆半島からの花粉が飛来している。

花粉学会会員の質問では来年度のスギ花粉発生予測と伊豆大島におけるスギ花粉症の件であった。多くの会員は今年の猛暑によりきたる昭和60年(1985)もスギ花粉が大量飛散することを予言した。大島でもスギ花粉症の

心配がある。

「空中浮遊スギ花粉調査成績と花粉症について(1981・1982)」佐渡昌子・小林秀子・浦久保五郎(東邦大学薬学部)、木村広行・高津好子(静岡済生会病院)、宇佐神篤(浜松医療センター)によると、静岡済生会病院屋上でダラム捕集器を用いた調査結果を統計資料とした。1982年は1981年の約4.4倍の飛散が認められた。また、アレルゲン花粉の季節変動と患者の発生の間には密接な関係があることが伺われた。

空中浮遊花粉の採集はダラム型、ロータリー型、カスケード型などの捕集器を用いたが、ダラム型は非能率的であることが証明された。しかし、簡易に入手、使用できるし、永長の実績がある。そこで、花粉学会会員など専門家の間では、将来はせめてロータリー型に改良したらよいとの案が出された。

また、アレルギー研究の会員からはスギ花粉と共通抗原性のある花粉についての質問が出た。これに対して、裸子植物花粉研究の専門家の意見として、スギ科コウヨウゼン(広葉杉) *Cunninghamia* の研究の必要性が指摘された。コウヨウゼンは鎌倉や京都などの古い寺院に大木があり、また、公園や庭木としても人気がある。花粉を大量飛散するが、時期は4月初めである。花粉はヒノキに似ているが、やや大きく40ミクロンくらいである。空中浮遊花粉としてはヒノキとほぼ同じ頃である。したがって、ヒノキとされている花粉の中にコウヨウゼンが混入している可能性がある。

今後ともアレルギー学会会員と花粉学会会員の協力が花粉症の研究、予防に必要である。

日本花粉学会会長・アレルギー学会評議員

上野実朗

アレルギー性鼻炎に
ヒスタグロビン・ネビュライザー療法